

# 未だ野

すぐろの

10月号 (通巻806号)



鶏  
の  
声

小川玉泉

老鶯と競ひ朝の鶏の声  
洗濯機止まり高まる蟬の声  
みんなんやデー・ケアへ妻送り出づ  
蟬時雨朝の牛乳温めず

明け近き雨にもめげず油蟬  
声暑く駅のホームのアナウンス  
暮れ切つてなほも競へり油蟬  
物音に怯ゆる妻や夏の月  
かなかなの近き樹に鳴く夕べかな  
秋立つを待たず蝸庭に鳴く  
桜樹老ゆ初ひぐらしを縋らせて  
蝸の声の抑揚運ぶ風

# 石の影

松本三千夫

実朝の弑されし磔ただ灼けて  
日日草昨日の日記今日書きて  
時つくる声とはならず羽抜鶏  
鳶の輪のこゑをこぼさず花海桐  
花合歡へ日暮を運ぶ雲流れ  
梅雨蝶の息荒々し石の上  
海霧流れ島の暮しの灯の早し  
日盛や正宗鍛冶の音絶えず  
農一人大樹に憩ふ夏野かな  
残照の路地風鈴とカレーの香  
石に置く石の影濃し河原灼け  
漁り火の寄りては離れ星涼し

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 白日傘

松田泰子

喘ぎつつ生きてゐるなり梅雨明くる  
薬よく効いて夏風邪より怖し  
老斑や杏子の里の従姉妹たち  
産土に裏道あまた花茨  
枝豆の大釜ゆでをもらひけり  
薫風や木登りの子の足が見え  
ひなげしを大き軍手が束ねをり  
白日傘心の中に立ち止る  
切株の残るいのちに梅雨茸  
涼しさに振つて水切る小箆かな

## 短夜

安斎久英

高原の風を絡むる青芒  
子燕へ取つて返して親つばめ  
青柿に不意を衝かれぬぼんの窪  
麦秋や鳶天空を余すなく  
新緑に吸ひ込まれゆく山路かな  
短夜の泊船の灯か安房の灯か  
ためらはず基地のフェンスを夏の蝶  
老鶯や海見ゆるまで登りつめ  
梅雨寒や立ち居にかばふ膝がしら  
八つ橋を渡る日傘を開きけり



# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）



蛍の夜 森清信子

丁字路に風の生まれぬ合歡の花  
高ぶりの声とはならず蛍の夜  
海光の包む洋館花石榴  
空白み浅き眠りにほととぎす  
母の忌や音の届かぬ遠花火  
テラスより見渡す湖や紅薔薇  
伐採のすすむ公園梅雨茸

ほととぎす 吉田きみえ

緑 蔭 森清 堯

桑の実や風の重たき谷の径  
はんなりと葉先をはなれ初蛍  
凌霄の小路明るし蔵の町  
堰すべる水音近し半夏生草  
緑蔭や教師の声のよべ透り  
万緑の底の瀬の音子らの声  
山梔子のたそがれ時の花の鏝

今朝の夏畝切る僧のたすき掛け  
月上げて実梅の落つる宵の口  
母の忌の墓去りがたし濃紫陽花  
溪深しひねもすとどくほととぎす  
子や孫と食卓囲み暑気払ひ  
地下を出て乗り換へ駅の街暑し  
捨てかぬる名刺あまたや夜の薄暑

水無月の水

石黒興平

朝なさな沙羅の落花を掃きにけり  
しづしづと畳廊下や濃紫陽花  
水無月の水ふくみたる苔の艶  
梅雨の靄北山杉の秀の隠れ  
石文の刻字に及び苔の花  
待合の粗壁涼し鳥語降る  
蛩舞ひひときは闇の深まりぬ

風涼し

岡田史女

くちなしや少し錆つく膝頭  
さやぎては風の匂ひの茅の輪かな  
海望む丘の墓域や風涼し  
居留地に残る碑ねむの花  
水打つて客待つ山手十番館  
石工らの石割る音や夏盛ん  
寄り合ひの上座下座と団扇かな

梅雨の蝶

岡野里子

白日の風やもつるる梅雨の蝶  
木洩れ日に池塘耀ひ九輪草  
湖よりの風のさざなみ青芒  
単線の終着駅や夏つばめ  
黒南風や汐の香著き無人駅  
きらめける沖の潮目や花茨  
青葉風抜くる百間廊下かな

爆布

小倉正穂

ゆきのした乏しき路地の日を頷ち  
一と処ゆたかに峡の麦の秋  
梅雨ふかき昼点しても点さでも  
真夜ひらめく匂にこだはりて明易き  
草引きて涉りくる風深く吸ふ  
樹々の風取り込み爆布蒼きかな  
瀬の音も共に啜りてところ天

# 青炎集

## 小川玉泉選



千葉

岡井マズミ

横浜

河合とき

竹皮を脱ぐ森の辺やビル迫る  
両の手をしばらく籠に螢の火  
ほうたるの留まる髪の薄湿り  
二歩に尽く木橋なりけり草清水  
**半夏生森の昼餉の海老ピラフ**  
獲物齧る目玉の大きやんまかな

山法師雨呼ぶ雲の峠道  
三叉路の一つは海へ顔の花  
園児らのプールにはしやく水しぶき  
**放課後の児ら駄菓子屋の葭簀陰**  
夢に見し人には会へず合歡の花  
田植過ぎ日本海今朝紺碧に

横須賀

大川暉美

横浜

庵原敏典

**少年のノックー途や雲の峰**  
戸を練るや賜る風と夏雲雀  
蕉翁像へ真つ直ぐ通す風涼し  
菩提寺の百年の庫裏梅雨灯す  
園児らや梅雨の晴間の縄電車  
姉逝きて庭の実梅の落つるまま

**白南風やサーファー乗りて飛ぶが如**  
老鶯や尾根道に出て仰ぐ富士  
茅葺の厚き古刹やねぶの花  
梅雨晴れや梨の実小さく空を向き  
列長き秘仏公開ねぶの花  
海霧うすれ動き始むやタグボート

横浜 三橋 玲子

足柄の巖彩どる濃紫陽花

あをくさきおもひで川の蚩狩

銀鱈の初の押鮪旅情湧く

短夜の雨音に覚むひとり旅

窓外の南アルプス雲の峰

甲矢乙矢射終へしあとの汗水漬

横浜 小田嶋野笛

煌煌と看取り帰りを梅雨の月

移ろひの果てのむらさき七変化

連れの息ととのふを待つ日陰かな

君の名はと訊ねてみたり夕蚩

浮人形寄りて離れて仕舞風呂呂

青蚊帳へ猫の連れ来る星の影

横浜 鍋島武彦

太宰の書拒みし日あり桜桃忌

花真産に転び仰げり雲竜図

時の日や電車乗る人降りる人

出無精の妻の外出梅雨晴間

空梅雨や野の草花の彩冴えず

高階の二人暮しや金魚玉

横浜 山崎 稔子

松葉のごと手揉みの新茶賜りぬ

クラフト紙の鮫折る夫や梅雨深し

梅雨晴れや天を見据うる鬼瓦

金色の宝珠まばゆき薄暑かな

くぐもれる梵鐘の音や沙羅の花

大桶の高みへ蝶や梅雨の明け

横浜 福永 幸子

谷間や田の一枚に花菖蒲

胃ぐすりの苦味を舌に暑き夜

灯の涼し藍のいる濃き手塩皿

朝食の旨き黒パン避暑の宿

鰻を割く漁婦の小さき束ね髪

家苞にあごの竹輪を購へり

横浜 脇澤 久子

よく冷やし水羊羹の桜の葉

旅程組む梅雨の机に木曾の地図

音だけのビルの彼方の火花かな

今更に若さの羨し半ズボン

古鉛筆削り並べて梅雨のひま

梅雨明けて一きは白き百合の花

# 耕 土 集

## 松本三千夫選



小屋泊り夏炉に焼ふる粗朶の音

高原の朝靄染むる杜若

味噌付けて胡瓜頬張る沢の味

炎帝や切子グラスの緑茶飲む

古き家の棕櫚に纏はる凌霄花

横浜 北郷 和顔

鹿踊りの女鹿少年若楓

脱ぎたての衣傍らに青大将

片膝の蚩肴の地酒かな

医王寺に武士の道聴く青時雨

竹若葉暗きをぐるる芭蕉坂

宮城 門間としゑ

用水の流れ激しき田植かな

晴れ間みて草刈る畑や鳥騒ぐ

梅雨晴の大山望む相模川

八ヶ岳郭公の声響きをり

皇月富士眺めつ入りぬ露天風呂

座間 宮澤 勇夫

くちなしの八重は一重に如かざらむ

夕立して埃くさきも在所かな

町内の古老の撫つる山車の傷

みんなみや目にて諾ふ別れかな

諍いは夫より退きぬ冷奴

横須賀 齊藤 眉山

古民家の庭や際立つ濃紫陽花

木の間より笛の音聞こゆる夏祭

待つ人の増える踏切梅雨の事故

干し物を隣家飛ばせり夏嵐

地図持ちて城より眺む首夏の町

横浜 行川 秀雄

松蟬の声ほとぼしる登山道

杉の美林下るトロッコ梅雨湿り

檜葉の香の身に滲みにけり木曾の梅雨

信玄の棒道辿る夏の霧

ほうじ茶をすする宿場の白雨かな

狭山 沼崎 千枝